

大聖世尊章（三帖第四通）

それつらつら、人間にんげんのあだなる体ていを案あんずるに、生しやうあるものはかな
らず死しに歸きし、盛さかんなるものはついに衰おとろうるならいなり、されば、
ただいたずらに明あかしいたずらに暮くして、年ねん月がを送とるばかりな
り、これまことに、なげきてもなおかなしむべし、このゆえに、上かみは
大聖世尊だいしやうせそんよりはじめて、下しもは惡逆あくぎやくの提婆たいばにいたるまで、のがれが
たきは無常むじやうなり、しかればまれにも受うけがたきは人身にんじん、あいがた
きは仏法ぶつぽうなり、たまたま仏法ぶつぽうにあうことを得えたりというとも、
自力修行じりきしゆぎやうの門もんは未代ななれば、今いまの時は出離しゆつり生死しやうじのみちはかな
いがたきあいだ、彌陀如来みだにょらいの本願ほんがんにあいたてまつらずは、いたずら
ごとなり、しかるにいますでに、われら弘願くわんの一法いっぽうにあうことを得え

たり、このゆえに、ただねがうべきは極樂浄土、ただたのむべきは
弥陀如来、これによりて、信心決定して念仏申すべきなり、し
かれば、世のなかにひとのあまねくこころえおきたるとおりは、ただ
声に出して、南無阿弥陀仏とばかりとなうれば、極樂に往生す
べきようにおもいはんべう、それはおおきにおぼつかなきことなり、さ
れば、南無阿弥陀仏と申す六字の体は、いかなるこころぞという
に、阿弥陀如来を一向にたのめば、ほとけその衆生をよくしら
しめして、すくいたまえる御すがたを、この南無阿弥陀仏の六字
に、あらわしたまうなりとおもうべきなり、しかればこの
阿弥陀如来をば、いかがして信じまいらせて、後生の一大事をば
たすかるべきぞなれば、なにのわずらいもなく、もろもろの
雑行雑善をなげすて、一心一向に弥陀如来をたのみまいらせ

て・ふたごころなく信じたてまつれば、そのたのむ衆生を・光明を
放ちて・そのひかりのなかに摺め入れおきたまうなり、これをすな
わち・弥陀如来の摺取の光益にあずかるとは申すなり、または、
不捨の誓益ともこれをなづくるなり、かくのごとく阿弥陀如来の、
光明のうちに摺めおかれまいらせてのうえには、一期のいのち尽き
なば、ただちに眞実の報土に往生すべきこと・その疑あるべから
ず、このほかには別の仏をもたのみ、また余の功德善根を修して
も、なににかはせん、あらとうとやあらありがたの阿弥陀如来や、
かようの雨山の御恩をばいかがして報じたてまつるべきぞや、ただ
南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と声になえて、その恩徳をふか
く報尽申すばかりなりと、こころうべきものなり、

あなかしこ あなかしこ

(不読)

文明六年八月十八日

大聖世尊章の大意

人間のはかないようすをよくよく考えると、命あるものはかならず死にいたり、盛んなものも最後には衰えてしまうのが世のな라이です。それなのに、むだに日を過ぎしているのは嘆かわしいことです。

釈尊から五逆十惡の提婆にいたるまで逃れることができないのは、無常のことわりです。私どもは、受けがたい人間界に生を受

け、聞きがたいみ仏の教えに遇うことができませんでした。今は末法の世ですから、自力の修行によっては迷いの世界を出ることができず、ただ阿弥陀如来の本願によるしかありません。今、その教えに遇うことができたのですから、浄土を願ひ如来をたのみ、信心を決定して念仏を申すべきです。しかし世間の人は、信心がなくとも、南無阿弥陀仏と念仏しさえすれば浄土往生ができるように思っていますが、それは大きな心得違いです。

- 5 -

南無阿弥陀仏の六字とは、阿弥陀如来をひたすらたのみたてまつる人を、如来はお救いになるといういわれをあらわされているのです。ですから自力にたよることをやめ、一心に阿弥陀如来をたのみ、二心なくおまかせするならば、如来はその人を光明を放っておさめとってくださるのです。このことを撰取の光益といい、不捨

の誓益ともいうのです。このように阿彌陀如来の光明におさめと
られているのですから、この世の命が尽きたら、ただちに浄土に往
生することは疑いありません。このほかに別の仏をたのみ、また他
の行や功德をおさめても、なんのやくにもたちません。

ああ、なんと尊くありがたい阿彌陀如来でしょう。その広大な
ご恩に報じるには、ただ南無阿彌陀仏南無阿彌陀仏と念仏
して、仏恩を報じるばかりであると心得るべきです。